



Title	韓国語における行為要求の「-s i l k e y y o」に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	高, 先慶
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15691号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91179">https://hdl.handle.net/2115/91179</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Sunyoung_Ko_review.pdf, 審査の要旨



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 高 先慶

主査 教授 李 連 珠  
審査委員 副査 教授 佐 藤 知 己  
副査 教授 権 錫 永

## 学位論文題名

韓国語における行為要求の「-silkeyyo」に関する研究

「-silkeyyo」は、韓国語において文末に現れる形式のひとつで、近年行為要求の場面において新たに使用されている接辞連鎖の形態である。「-silkeyyo」は、いわゆる「約束」の接辞「-lkey」を中心に、尊敬を表す接辞「-si-」が前接し、丁寧の補助詞「-yo」が後接している形態であり、従来なら同一の述語には共起できない「-lkey」と「-si-」の配列であることで、先ず注目されることになり、非文若しくは過剰敬語としてみなされる研究もある一方で、ここ数年間でますますその使用が広がっている。

本論文は、言語学の形態統語論的分析や形態意味論的考察から「-silkeyyo」という言語形式が出現したプロセスを究明し、また記述言語学的手法や社会言語学などの知見に照らして「-silkeyyo」が用いられている発話場面の特徵及び意味機能について考察を行ったものである。

先ず、本論文全体に関しては、「-silkeyyo」という新たに登場した言語形式に対して、形態統語論・意味論・社会言語学などの言語学手法や知見に照らしながら、その形態構造と意味機能を明らかにしようとした試みとして評価できる。

二つ目は、「-silkeyyo」に含まれている屈折語尾「-lkey」に先ず注目し、その意味機能について再考察する立場から、「約束」という本来の意味機能から「行為指示」の意味機能にまで拡張するプロセスを明らかにした点である。さらに、「行為指示」という類型の意味機能を持つものとして、「-silkeyyo」の他に「-lkeyyo」、「-lkey」を網羅して考察の対象とした結果、それらにおける「行為指示」としての使用場面や意味用法としての特徴を明らかにすることができた。

三つ目は、屈折接辞「-lkey」が、「約束」を基本的意味とする屈折接辞として、必ず聞き手が必要な発話場面で使用されること、「-lkey」は、丁寧度が補助詞「-yo」によって調整される「非格式体」の屈折接辞の集合に属しているため、「格式体」が6等級で分かれている聞き手敬語法のどちらかに属するのと違い、「-yo」抜きのか「-yo」付きのかの二つの層位に分かれるのみであることなど、「-lkey」を言語学的論法から明らかにすることができた点である。

四つ目は、文脈の推論過程により「-lkey」が、「約束」の他に「決定の伝達」「宣言」「行為指示」といった多様な下位の意味機能が生じることについて具体例を挙げながら論じ、最終的に「-lkey」の持つ聞き手へ同意や了解を求めるような聞き手志向的態度は、約束の素性でもある意向の一致から生み出された第2次的発話効果であり、「-silkeyyo」は、この「-lkey」が行為指示の意味機能を獲得した後から尊敬の「-si-」と結合した形態であることを明らかにした点である。このプロセスこそ「-silkeyyo」が構造的に出現した背景であると捉えることができると思われる。

次に、社会言語学的手法を用いた考察から、「-silkeyyo」の出現は、格式ばった言い方を控えようとする言語外的環境とも関連性があり、行為指示の場面において聞き手に対して、心理的優位

>、<+聞き手志向的態度>、<+親密>を示すことで、様々な人間関係において「相手に指示をする」という負担を軽減する意図として使用されると述べている。この指摘は本研究の当初の目的でもある「-silkeyyo」の出現背景や「-silkeyyo」の意味特徴を明らかにしたもので、高い評価に値する。さらに、命令の「-e/ala」文と比較考察することで、「-lkey」文は話し手受益、もしくは受益とは関係しないが<させる力>の強い典型的な行為要求として使用されることを明らかにしている。

最後は、資料編でまとめているデータそのものに対しても評価したい。1998年から2023年までの間に発表されている各種ドラマ・映画・テレビ番組やインターネット上のブログなどから長年にわたり収集した文レベルの資料約500項目すべてに、グロス（言語学的注釈）や和訳を施しており、これらは今後韓国語言語コーパス資料として有意義に使用されることが期待できる。さらに、本論文の論考に必要な項目として、発話状況、話し手の年齢、性別、聞き手との関係、出典のみならず、意味機能の分類も記しており、収集と分析に長い間費やした筆者の労力が伺える。

以上を踏まえて、審査委員会では、高く評価できる点が多くある一方で、日本語表現における間違いが数か所みられると指摘されたが、日本語を母語としない申請者としてはむしろ相対的に優れた日本語能力を持っていると評価された。他に口頭試問では、今後日本語のみならず英語などにおける類似の言語現象との対照考察も期待したいとの意見があった。

本論文の成果については、論文投稿や国内外の学会などで口頭発表されており、今後関連する研究に役に立つ先駆的な研究であることも評価に加えて、審査委員会では全員一致して博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論を得た。